

# ネパール訪問記

小森 恵 (IMADR事務局次長)



ネパールにおける女性に対する暴力撤廃を訴える横断幕(首相官邸前)。

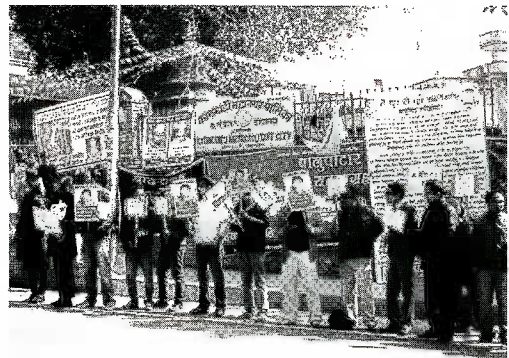
反差別国際運動は浄土宗平和協会の支援を受けて、ネパールのパートナー団体である FEDO (フェミニストダリット協会) と共にダリット女性の健康の権利に関するプロジェクトを実施している。2011年4月から始まったこのプロジェクトは、ネパール南部のタライ

地方パルサ郡にある FEDO パルサ支部が主体となって行っており、現在丸2年が過ぎたところだ。

浄土宗平和協会は「国際平和への貢献」のために、全国レベルで募金活動を展開し、平和実現をめざした NGO のプロジェクトに寄付をしている。IMADR のこのプロジェクトを含み、現在、他数件のプロジェクトが支援を受けている。今回、ネパールで進められているこのプロジェクトの現場を訪ね、ダリット女性たちと交流するためにスタディツアーが実施された。IMADR は現地の FEDO と共に訪問交流プログラムを準備し、日本から筆者が同行させていただいた。

## ネパールの現状

ネパールは 2008 年 8 月に発足した憲法制定議会がその任務を果たすことなく、4 回にわたる延長の後、2012 年 5 月に期限切れで解散した。11 月に予定されていた議会選挙は紛糾の末、延期となり、選挙日程はまだ決っていない。昨年 5 月に解散した議会には、憲法起草にマイノリティコミュニティの意見が



首相官邸前にピケを張る市民組織の人びと 2012年12月9日から2013年3月8日まで90日間続けた。

反映されるよう留保措置がとられた。FEDO も選挙活動にかかわり、3 人の FEDO 執行委員を含む 10 人のダリット女性が当選して議員となった。

ネパールの政治は混乱が続いている。昨年 5 月以降議会は存在していないし、暫定憲法のもとでの国家運営が 5 年続いている。先の議会選挙で第一党となったネパール共産党マオイストも議長派と副議長派 (現ネパール連立政権の首相) の間で亀裂が生じている。滞在中の 2 月 18 日は「民主主義の日」で官公庁と学校が休みとなり、その翌日は野党による首相退陣を求めたゼネストが決行された。朝から夕方 6 時まですべての公共輸送機関がストップした。官公庁や学校は休みとなり、商店も軒並み休業となった。私たちのような外国人が利用するバスだけは例外扱いとなったため、普段は交通渋滞で進まないカトマンドゥ市内をスムーズに移動できた。ゼネストではあるが、車窓から見る町の景色は穏やかで、広場には人びとが集まり、球技やピクニックを楽しんでいた。道路沿いのあちこちに軍の兵士や警察官が配備されているものの、景色はどこまでものどかであった。

## 女性に対する暴力

ネパールにおいて女性、特にマイノリティコミュニティの女性に対する暴力は蔓延している。レイプ事件を含めジェンダーに基づく暴力は時には死にも至る。ネパール警視庁によれば、昨年 1 年だけでも 555 件のレイプ事件および 156 件のレイプ未遂事件が起きている。DV も年々増加傾向にあり、昨年は前年度から 66% 増え、2,250 件通報された。これ



女子高生たちと一緒にシュプレヒコール。

らは警察に届けがあったケースだけに限られている。さらに警察に届けられても、適切な調査がなされず、不処罰になる事件もある。女性差別撤廃の国際キャンペーンに呼応しながら、FEDO は他団体と共同で、2012 年 12 月 9 日に「家庭の平和は世界の平和の始まりである」をスローガンに全国各地で集会を開催した。カトマンドゥでは集会の後、首相官邸に向けデモ行進を行い、官邸を挟んだ道路の向かい側で横断幕やプラカードを立てて、長期的で平和的な抗議活動を始めた。筆者が訪れた 2 月 22 日も写真のようにピケを張り、10 人以上の人びとが官邸に向いシュプレヒコールの声をあげていた。毎日絶やしたことはなく、さまざまな団体や個人が順に駆けつけてくるということだった。3 月 8 日の国際女性デーを頂点にして 90 日間続けるということであった。道行く人もピラを受けとるなど好意的で、写真のように近所の女子高生も一緒になって声をあげていた。

## 着実に実を結んでいるダリット女性の取り組み

スタディツアーの主目的であるパルサ支部には 2 月 20 日・21 日に訪問した。インド国境沿いにあるパルサはネパールの中でも貧しいタライ地方にある。ネパールではカトマンドゥなど一部の大都市を除き、地方に行けばダリットへの差別や排除の慣行は根強く残る。公平性が保障されているはずの行政サービスさえも、周縁に追いやられた人びとには充分行き届いていない。全国的にみて女性の識字率は低い、ダリット女性の識字率はさらに低い。女性たちは行政による無料の母子保健や予防接種あるいは医療費負担などについて知らされていない。また知ったとしても、どうすれば利用できるのかを知らない。FEDO パルサ支部の保健プログラムは、女性たちにそれを知らせ、使えるようにするとこ

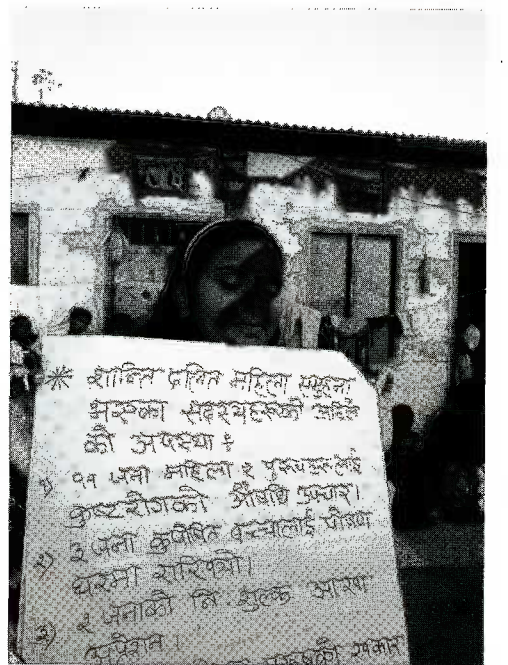


FEDOパルサ支部の女性グループを訪問。日本からもってきたちぎり絵を子どもたちと一緒に作る。

ろから始まった。

訪問した 2 力所の女性グループでは、FEDO の保健活動を始めたことにより、それぞれの村の中で結核、ハンセン病、HIV 感染、栄養不良などに罹患している人が発見され、国が提供している無料の医療サービスを適切に受けることができるようになったと聞いた。当然の権利である市民サービスをダリット女性たちが使えるようになるには、女性側だけではなく提供する行政側の意識も変えなくてはならない。パルサ支部では保健だけに留まらず、水道、畜産、教育など、異なる地方行政の部門にアプローチをし、連携しながら職員の意識も変えてきた。地方行政の予算配分の鍵を握るのは地方議員である。いつか、政治参加もパルサ支部の活動の一つになるかもしれない。保健サービスへのアクセスから始まった女性たちの取り組みは、生活におけるさまざまな問題を有機的に結びつけ、関係者を結びつけながら、変化の波を起している。今後が楽しみである。

(こもりめぐみ)



パルサ支部の二支部長。この年の活動の成果を説明。



「葉はちゃんと飲みましょう」保健啓発のポスター、パルサ支部事務所にて。



ダリット女性たちによるさまざまな取り組みの記録。パルサ支部事務所にて。